

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十四年七月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十九卷三号（通巻第二一九号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第219号

7. 2012

# 頸椎症

品川 鈴子

術前の食絶つ月に菓子頂け

麻酔醒む城山よりの雷響とよも動し

麻酔覚め生の側なる稲光り

身じろげぬマリオネットは玉の汗



繰り糸切れし人形の首汗ばむ  
冷房に頭<sup>かしら</sup>上がらぬ壊れ木<sup>こ</sup>偶<sup>く</sup>  
昼寝ざめ術後の頭骸何噸か  
他界より誰彼頭るる予後昼寝  
青嵐羅漢は父の百面相  
卯の花腐しアダムの像に陰<sup>ほと</sup>しづく



# 玉

# 鈴

# 吟

大阪 野口喜久子

君が代にひとつ開かぬ浅蜷汁  
パトカーに追はるる単車花の冷え  
胸中に封印の恋花ゆずり桃  
途絶えゆく船場の言葉鳥雲に  
ハンガーを銜へて鴉菜種梅雨

兵庫 蓮尾みどり

四月馬鹿行方不明の花ばさみ  
この春でいくつになると夢に来て  
八重むぐら難聴にして地獄みみ  
降り立てばさくら夙川のどかなり  
隣り合いますぐ打ちとけて花筵

兵庫 長谷川鮎

濁流に山藤の先洗われて  
関宿の高札三段梅雨晴間  
追い分けの溝に十葉鈴鹿関  
栗の花河童の里に紙芝居  
隠田か早苗の列は歪みおり

愛媛 濱田ヒチエ

糸桜満開の下客となる  
骨折の癒えし米寿の花見席  
物干しの遠く飛ぶ等春嵐  
快晴の陽気の中に花惜しむ  
靴跡に花びら積もる雨の後

大阪 早川周三

春寒に釉葉混ぜる手の痛さ  
雨水にてほころび初むる梅林  
刎頸の二人鱸酒汲む夜なり  
英虞湾の島蔭染める春夕焼  
酒旨し栄螺の壺焼き伊勢の宿

兵庫 林哲夫

沈丁花今宵もぶらり六千歩  
トイレまでぴかぴか尽し入園児  
老夫婦花見の予定折合はず  
花衣十年前の若き柄  
花見酒投句忘れて馬鹿騒ぎ

兵庫 林 美智

わが庵は有馬の花を居ながらに  
骨折で日記は余白四月馬鹿  
前日に検査も終へて春嵐  
清明の山はそのまゝ朝迎ふ  
検査終へ肩の荷おりの花見莫塵

兵庫 平田恵美子

読唇術で探る呟き春の闇  
使ひ分けするペンネーム春の夢  
春手袋外し別れの停車場  
ウインドウへ背を伸しけり春コート  
桜トンネル幹の肌老い人も老い

愛媛 福島松子

聞き役は一人も無くて花筵  
お弁当二つぶら下げ春三日月  
花篝靴の先まで正装し  
風光る廃校利用のレストラン  
鑿跡の残る岩磐花の陰

愛媛 福田かよ子

猫の子のかたまり眠る寺の廊  
花吹雪米寿の耳にイヤリング  
足早に寄り来る齡花満開  
山家なる婆の萬屋初燕  
春帽の団体がゆく五条橋

兵庫 藤井久仁子

花の園戯れの恋いくつあり  
猫の恋床下塞ぐ別荘地  
花の冷え組み合ふ腕のなかりけり  
朝摘みの京芹の匂戴きぬ  
花過ぎのサッチャー女史の映画観る

兵庫 藤田かもめ

琴の音の雨だれ拍子春の宵  
你好ハヨの声もありけり桜狩  
門扉閉づ浄水場の夕ざくら  
春の土蹴りてかるがる逆上がり  
相撲甚句流るる当麻うらけし

大阪 藤田京子

花冷えにおくるみの嬰兒抱きしめる  
這い這いの児を見守りて春障子  
万愚節ならぬ訃報の涙声  
思うまま生きて旅立つ春嵐  
春嵐遺影の友の美しき

兵庫 史あかり

寝ぐせ髪元気良く立つ入学子  
文化財の総門くぐり入學式  
囀りに耳も心も預けをり  
山頂へ長き階段若葉風  
鳥雲に絶筆となる未完の句

兵庫 古井公代

新品はランドセルだけ入学す  
門限の有りてのこそ夜の桜  
花沿線の特急電車ひたすらに  
ついに来ぬ燕の古巢えき駅舎に欠け  
榭落しアリア絶唱春の宴

大阪 古林田鶴子

車椅子寄せて手に触れ草の花  
さくら餅齒なしの口元ほころびて  
殊の外墓園の桜かゞやける  
花いつゝ精一杯に若ざくら  
花便り恙なしやと旧き友

香川 細川知子

菜の花にまぎれスピード取締  
刷りたての名刺を交はず桜時  
さくら咲く今も古代もアイメイク  
春寒の葬に靴下二重履き  
理不尽もすべて受入れ春愁

兵庫 細野恵久

ついて来る土塊叩き草を引く  
戸締りの一枚毎の暑さかな  
バスに乗り少年すぐに日除とる  
山門の奥に風あり百日紅  
鮑切るガレのガラスの色に切る

愛媛 松井洋子

岩堰に残る鑿跡落花積む  
譲り合ひ渡る吊橋花大根  
白き月一つ浮かせて夕桜  
花曇り猫の予報は午後雨に  
恋猫のせはしなき日や爪を切る

埼玉 松木清川

梅古木一本残し整地せり  
花大根レンタルルームを囲みけり  
本家より分家が増えて花大根  
数独の難題解けて花水木  
触れ合うて春雪落す広葉樹

東京 松本アイ

日替りの日本茶香る春炬燵  
五十六の映画語りし春の宵  
あの人も同じ眺めか春の雪  
東北に槌音ひびけ露の臺  
塵めくや音なく積る銀世界

愛媛 松本恒子

遺品なる夫のハモニカ花の宴  
食してはみやげに一尾桜鯛  
寡婦の庭やれ相生の松の芯  
雲浮かせ一人見る贅花筏  
四五人の忍者めくなり野火猛る

愛媛 三浦澄江

花大根 廢鉾山に一人住む  
地響きす鉄橋の下草萌ゆる  
飛行雲万朶の花の天よぎる  
梅林に少年の声透き通る  
五月連休並んで休むシヨベルカー

兵庫 三枝邦光

糸ざくから崩れ土塀の城下哉  
花の雨ゴリラ夫婦の黙つづく  
大ぎやうの当て振り婆の花筵  
蒼天の堤に仰臥花衣  
花の雨夜半の煙と果つは私事

兵庫 水野範子

素振りの音校庭の花震はせる  
杉花粉静かに微笑ます聖母像  
春休みゆるゆる走る教習車  
花吹雪清盛塚を埋めつくす  
春夕焼バス待つ母子のスキップ音

兵庫 水野弘

枝々に紅き玉水梅芽吹く  
木の揺れる紅き椿の地を染める  
青い空真紅な花桃背を伸ばす  
入院の反応無き姉春終える  
辛夷咲く白弁五輪散り忙ぐ

香川 三橋早苗

山門の石の裂け目に咲く堇  
目を瞑る枯山水に春の水  
人並にペットも纏ふ花衣  
花埃落とすはたきを手渡され  
乾杯の輪の真中には新入生

茨城 三輪慶子

花盛りスカイツリーへ飛行船  
坊様のつむりあをあを花吹雪  
咲き満ちて異界のごとき花の下  
碑のここより古道山笑ふ  
二人居の夫に飛ばしぬしやぼん玉

埼玉 向江醇子

五月晴少女時代の海の色  
新緑や老いたる木にも若木にも  
ジュエリーの店より若葉輝けり  
雷雨来て人忙しくビルに散る  
我も母嫁も又母カーネーション

兵庫 村田とくみ

点火前いかなご達のつぶらな眼  
手入よき隣の庭に露の臺  
外壁補修やうやう終へて春を待つ  
前うしろ皆帽マスケ我も又  
母方の紋を尋ねる初雛

# 鈴の奏

品川鈴子選

紫木蓮の一片拾う嵐あと 兵庫 植田 雅代

ぐるぐるとクレーンが廻る春嵐

雨柱咲きし桜を切り落とし

座敷童みつめる老母春秋

野で遊び飛んでくスイトピー 兵庫 片山八重子

フラココで空中散歩リボンの子

鶯に弥陀の声かと庭を掃く

神前に巫子舞ふ如く紅枝垂

桜餅離職十年皺む掌に 高知 田村 一翠

創立の社旗がはためく桜まじ

白昼の花影昏き分校舎

母措きて子がかけ上る花の礎

こんなにも梅を咲かせて谷畠 埼玉 松岡悠喜夫

強東風や子を送り出すドアー口

春風やせんべい持たず鹿あやす

独酌のあと一人や君子蘭

シーサ吼ゆ背より陽炎もえたせ 沖縄 高橋 照葉

みずすまし己が光輪逃げ切れず

春の海散骨によき汐加減

裸婦像やまとふは花の風ばかり

南から北へ総なめ春嵐 兵庫 四葉 允子

長き列定期券買う新社員

春北風二度も出会いし救急車

空蒼しメタセコイヤの芽吹き待つ

うららかに居眠りさそう針仕事 山口 山本 敏子

独り居に男雛女雛を折り紙で

試歩の道今日はここまで萌木市

春寒し葉離せぬ事も馴れ

花人の寄り道誘ふフラミンゴ 兵庫 太田 健嗣

花見坂銀輪無音直滑降

老木が花芽差し出す参り坂

江戸仕込み落し嘶や冬深し 北村 和代

枝先に花と見紛ふ護符袋 兵庫

御快癒をと記帳の列に細雪

開演に先だつ黙三・一一

昨日今日何も変らぬ老の春



秀  
鈴  
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 唐鎌光太郎 //

\*選句は全て 品川鈴子

座敷童みつめる老母春愁い

植田 雅代

座敷童は東北地方の旧家に住むと信じられ小児の姿に髪を垂れて赤い顔の家神とか。枕返しなどのいたずらもするが、家の栄える因として大事にされる。この家を生涯かけて守った老母には、悲喜こもごもの春秋を共にした座敷童が誰よりも親しい。

野で遊び飛んでく〜スイトピー

片山八重子

昨今は子供も滅多に羽目を外せない物騒な時世。天災・原子炉事故：交通規制や校則に縛られつつ不安が多い。だからせめて遊ぶときだけでも、都会を忘れて原野に幼なころを解き放ち思う存分飛んでみよう。自然と一体化して蝶や野草や春風に変身する児。句柄もおのずとのびやかに。

桜餅離職十年皺む掌に

田村 一翠

桜餅を掌へ直に載せてしみじみ眺める。十年前までずっと働き徹し定年を迎えた掌は、手相が経歴を語る。この手で家族を支えた頃はくつきりと張りがあつたが、少し皺む掌は血色も良くて長生きの象徴。餅を包む桜の葉にも葉脈の物語る樹相があるのだろうか。

こんなにも梅を咲かせて谷畠

松岡悠喜夫

ひっそりと静まる谷合いの畠に、梅の花が今まさに満開の時を迎えている。

こんなにも、と言う修辞は、ある程度の花の量とたたずまいの見事さを連想させる。作者は、人知れず精一杯の花を咲かせている梅にけなげさと愛おしさを感じたのだろう。そんな作者のやさしい思いが伝わってくる。

春の海散骨によき汐加減

高橋 照葉

水も温んできた春の海。ふと、こんな長閑な海に散骨して貰うのも悪くはないかと思う。

春の海と散骨の取り合わせが面白い。本来、厳肅な筈のテーマをまるで温泉の湯加減でも語るように明るく詠った。いかにも南国の人らしいおおらかさとユーモアがある。人生、究極の願望かもしれない。最期は明るくあつげらかんぞと終えたいものですね。四月生まれの私なども、花の下にて春死なむ、と願っている。

春北風二度も出会いし救急車

四葉 允子

春と言うのに嵐のように吹きすさぶ風の中を、やんごとなき用があつて外出した。突風を受けて時々足元がおぼつかなくなる。それでなくともこのところ足腰の衰えを感じているのだ。身の危険さえ感じる。そんな不吉な思いも抱えながら歩いていると、救急車に出会つてぎよつとした。それも二度までも。用を済ませて早く帰ろう。

ある程度以上の年齢になると素直に共感できよう。

試歩の道今日はここまで苗木市

山本 敏子

しばらく入院して、足腰がすっかり弱くなってしまった。医師からも用心しながら足慣らしするよう言われた。毎日近所を散歩している。しかし、散歩は楽しい。町の移り変わりにも気づく。苗木市も始まつたらしい。今日はそこまで歩くことにしよう。

たくさんの苗木を見て、作者も元気を貰ったことでしよう。気持ちのいい句だ。

花人の寄り道誘ふフラミンゴ

太田 健嗣

灘の動物園だろうか。地元の桜の名所でもある。作者は花見に来たのだ。しばらくは花人よろしくさまざまな思いを反芻しながら散策する。すっかり堪能して、さて帰ろうかと視線を移したところ、動物園のフラミンゴの群れが目に入った。咄嗟にこれも見て帰ることにした。

作者の日常のふとした心の動きが感じられ、微笑を誘います。いつまでも何に対しても興味を持ちたいものですね。

開演に先だつ黙三・一

十北村 和代

演奏会の会場。折から、東日本大震災の起こった日でもある。開演に先立ち、会場の全員が起立し黙祷を捧げた。

阪神大震災を体験した者としては他人ごととも思えない。会場の静寂の中で、作者も厳肅な思いを噛みしめている。(以下略)